

健診受け意識が向上

2000の検査項目に価値

挑戦!! 健康寿命

① 弘前大COIプロジェクト

岩木健康プロジェクト

「いよいよ健康は自分で責任を持つ時代が来た」。団塊の世代が75歳以上となる2025年が迫り、医療費60兆円時代の到来が危惧される中、弘前大学COI(センター・オブ・イノベーション)の中路重之拠点長は、健康づくりの必要性をこう強調し、一人ひとりの健康意識や知識の向上の必要性を訴える。

「短命県返上」「健康長寿社会の実現」に取り組み弘前大学COI。その「核」となる「岩木健康増進プロジェクト」は05年に、旧岩木町の平均寿命アップを目標に掲げてスタートした。「平均寿命は医療だけの問題では



なく、さまざまな要素が影響する」とし、健康な住民約1000人の健診データを追跡し

たのが始まりました。13年に文部科学省の「革新的イノベーション創造プログラム(COI)」に採択されると、プロジェクトは飛躍的に成長を遂げる。健診14年目となる18年度の検査項目は遺伝子や内臓脂肪、歩行分析、睡眠、食事、口腔、

職業、家族構成など2000にも及ぶ。最近では参画企業の増加により、疾病予防などに力を注いでいる。このビッグデータを基に、東京大学や京都大学などの大学間連携が進み、日本のトップデータサイエンティストによる最強解析チームも本格稼働。

また初期段階だが、糖尿病や認知症、動脈硬化など20もの特定疾患の新規発症(3年以上)を予測するモデルが構築されている。今年度は腸内細菌などの解析に基づいた「弘前発」の「腸腸チエック」検査キットの結果で、15年の本県の

販売も開始し、社会実装の芽が出始めた。健診に参加した70代女性は「時間がかかるが、隅々まで分かるのが、楽しみになっている」と生き生きとした表情を見せる。60代男性は「家族で健康について話すようになった。孫のために生き生きしたい」と自ら結果を分析している。

会場には医師、市民ボランティア、学生、COI参画企業、大学、自治体などから1日300人近くのスタッフが集結。おのおのが健康づくり、研究活動の意義を強調。「短命県返上は何としても達成したい。本気でやらなきゃ駄目なんだ」と力を込める。

エクトを求心力に「短命県返上」を掲げ、産官学民が連携する弘前大学COIは、3年ごとの国の中間評価で「S」を獲得し、2期連続最高評価となった。少子高齢化が急速に進む中、日本一の「短命県」のフィールドを逆手に取った弘前発の挑戦は、国内外の注目を集める。地方大学の枠を超えて躍進する取り組みを5回にわたって紹介する。(成田真由美)

「岩木文化センター」「あそべる」などを会場に長年にわたり続く岩木健康増進プロジェクトの健診。弘前COIの核となっている2018年5月

厚生労働省が17年に公表した都道府県別の結果で、15年の本県の

平均寿命は男女ともに全国最下位だった。一方、各種データをみる

と、本県の平均寿命の延び幅は全国3位(男性)となるなど、平均寿命・健康寿命の延伸に向けた取り組みは着実に効果を表し始めている。

中路拠点長は「産官学民のすべてがそろい、短命県返上という目標に向かう人たちのプラットフォームの役割がある。単なる健診ではなく、健診後の参加者たちと連携した健康づくり、まちづくりを目指している」とその意義を強調。「短命県返上は何としても達成したい。本気でやらなきゃ駄目なんだ」と力を込める。